

# マルクス『資本論』を超越するもの

——大木啓次氏労作『マルクス価値論を見直す』の出現——

山 本 二三丸

まえがき

1. 「問題の所在」
2. 「見直される」べきマルクスの所論
3. 「商品体の使用価値の捨象」の問題
4. 「労働生産物の使用価値の捨象」の問題
5. 「価値の発見」の問題

6. マルクスの「使用価値の捨象」の「致命的欠陥」

7. マルクスの「価値の抽象」の「虚構」

8. 大木氏による『資本論』批判の画期的意義

あとがき

まえがき

1991年1月、立教大学教授の肩書をもつ大木啓次氏は、長年の沈黙を破って、画期的な労作を発表されたが、それは、雑誌『経済評論』2月号に掲載された『マルクス価値論を見直す』という題名の論文である。大木氏は、「見直す」という日本語をつかって、いと物柔らかにへりくだってその表題をつけてはいるが、しかし「見直す」とは、「マルクス価値論」なるものがそのうちに内蔵している重大な過誤や欠陥に注目してこれらを明確に指摘し、摘出することであり、それによって、当然のことながら、それよりはるかにすぐれた、真に完璧な新しい、大木氏独自の「理論」が展開されるということの意味するものだということを、われわれは十分認識しなければならないのである。その「見直し」がどれほど決定的な意義をもつものかということは、われわれ凡人には容易には理解しがたいが、しかし、その論文につけられた副題を一読することによって、右の労作が、凡人の理解をはるかに越えた画期的なものであることを、おぼろげながらも感じとることはできるのである。その副題は、「価値の論証と使用価値」というのである。「使用価値」という言葉が、商品の使用価値であって、生まっかじりの自称経済学者がこねあげた駄作論文などのもつ「使用価値」でないことは、われわれ凡人にもわかるが、「価値の論証」という、むずかしい言葉は、われわれが逆立ちしてもとうていわかるものではない。というのは、凡人にとっては、「論証」という言葉は、国語辞典を繙くまでもなく、ある事柄についての主張が正当であること、または誤っていることを、議論の上で証明することだとしか受けとれないからである。たとえば、「価格の論証」という言葉など耳にしたときには、われわれは、一人のこらず、その言葉を口走った人間の頭のほどを疑ってかかるという傾きがある。だが、マルクスの経済理論を「見直し」て、これにかかるく超越するほどの大木氏がかかげている「価値の論証」である。むしろ、疑うべきは、凡庸なわれわれ自身にある

ことも、十分考慮しなければならないのである。この「価値の論証」の深遠な意味は、大木氏の画期的労作をはじめから終りまで丹念に味読することによって、ようやく感じとられるといったものなので、これについては後段で改めて考えることにしたいと思う。が、そのまえに、よくよく見究めておく必要があるのは、大木氏の論文の主題である「マルクス価値論」という、一見さりげないようにみえるこの言葉そのものが、すでにマルクスをはるかに超越した大木氏自身の理論的高水準を示しているものだ、ということである。マルクスは、彼の主著『資本論』の第1巻第1章第1節と第2節を読んだたいいの人々が、「マルクスはそこで価値を論じている」と言ったり、また書いたりしているのにたいして、「そうではない、私はそこで商品性を論じているのだ」ときっぱり答えるのをつねとしていたのであるが、より高い水準にあるわが大木氏の目からみれば、いまから百数十年以前のマルクスの考え方や用語は、彼の主著『資本論』の内容とまったく同様に、すでに「見直される」べきものでしかないのである。

以上みてきたように、大木氏のこの画期的労作は、本文について一行も読まないうちに、ただその表題と副題とをみただけで、それがいかにマルクスの『資本論』などより高い水準に立つ傑作であるかということが、十分にうかがわれるのである。そこで、われわれは、以下のつたない本文で、大木氏の画期的労作の内容について、それがいかにかるくマルクスの『資本論』を超越した重大な意義をもつものかということを、——おそらくその深遠な意味は十分には感じとりえないであろうが、——非力ながら、吟味してみることにしよう。ただし、「マルクスの価値論」なるものの「致命的欠陥」を暴露しその重大な「過誤」を匡正したより高い水準の画期的理論をわずか400字づめ原稿用紙30枚足らずの長さの論稿で完全に展開してみせてくれている大木氏とちがって、凡庸愚鈍のわれわれとしては、とうていその真似など叶うものではなく、その倍以上の紙数を費やしても、なお舌足らずの駄作に終わらざるをえないであろうことを、あらかじめ諸君に申しあげて諒承を得ておきたいと考える。

最後に、以下での吟味の便宜を考えて、ここにあらかじめ大木氏の労作を構成する各節の題目をかがけておこう。

「まえがき

- 一 商品体の使用価値の捨象
- 二 労働生産物の使用価値の捨象
- 三 抽象的人間労働と価値の発見
- 四 使用価値の捨象
- 五 価値の抽象」

## 1 「問題の所在」

ここに「問題の所在」と言っているのは、私にとっての問題の所在ではなく、またマルクス

を超越した大木氏の大論説の中に見出されるかもしれない問題についての所在ということでもない。それは、大木氏から見て、はるかに水準の低いマルクスが「見直される」べき「致命的欠陥」を露呈しているとされる問題の個所は、およそその辺に在るのかということであり、いうまでもなく、批判者大木氏から見ての「問題の所在」なのである。そのことをおわかりいただくために、私はことさら括弧をつけて表示したのであって、読者諸君は、この拙論をお読みになるとき、小生が括弧をつけた言葉は、できるならば、「括弧つきの」という言葉を発音してから当の文字を音読していただきたいと考える。もっとも、「大学教授」という言葉のように、「括弧付きの大学教授」と発音して読むと、その人物が大学教授という一見りっぱな肩書はもっているが、その中味はおおよそ大学教授などといえたものでなく、「大学教授と乞食とは三日やったらやめられない」といわれるほどの無為徒食の輩<sup>やから</sup>にほかならないのだということを暗に示すことにもなるのである。この拙論の中ではそういう意味で括弧をつけることはきわめて稀であって、大多数の場合は、右の「問題の所在」と同じように、「超越者大木氏が言うところの」という意味を示したものである。それゆえ、この拙論の中で括弧つきの言葉が出てきたときには、どういう意味での「括弧つき」なのか、よくお考えいただくために、「括弧つきの」という言葉を発音して読まれるようおすすめしたいと思うのである。

大木氏における「問題の所在」は、その論文のはじめにおかれた「まえがき」によってうかがうことができると考えられるので、200字そこそこのその「まえがき」の全文をつぎにかかげてみよう。

「マルクスの価値論は、かれの経済学の基礎である。その価値論は、価値の論証のうえに展開されている。マルクスによる価値の論証は、基本的には、かれの主著『資本論』の頭章でおこなわれている。そして、その価値の論証のうちでも核心的部分は、いわゆる使用価値の捨象を分析しているところである。以下、そのいわゆる使用価値の捨象を分析することによって価値の論証がおこなわれているところを、『資本論』の文章にそくして検討してみよう」(『経済評論』1991年2月号、101ページ、この拙論の以下での引用にさいして、とくに出典を示さず、ただページ数のみを示したものは、すべてこの雑誌のページを示したものである)。

さきにもふれたように、マルクス自身は、「マルクスの価値論などというものはなく、あるのは商品論である」ときっぱり言っているのであるが、これは、大木氏によれば、あわれむべき短見であるのである。そして、マルクスの短見をいましめて「マルクスの価値論」なるものを「確立」した大木氏であるが、氏が「経済学の基礎」とであると明示しているその「価値論」が、『資本論』の中のどの部分を指していわれているのか、大木氏の超越的高水準にはるか及ばない低水準にあるわれわれにとっては、皆目見当もつかない。そのうえ、「その価値論は、価値の論証のうえに展開されている」と言われては、われわれ凡庸の輩にとっては、いよいよわけわからなくなるのも当然であろう。そもそも「価値の論証」という、凡庸な国語的知識をもってしてはとうてい感じとることもできない超高水準の用語がたてつづけに三度も出てくる

有様である。しかし「価値の論証のうちでも核心的部分は、いわゆる使用価値の捨象を分析しているところである」という、明確な「指示」を手がかりにして、まるで当て物でもさがすようにして考えることによって、どうやら『資本論』第一巻第一章第一節のうちのいわば前半部分の、交換価値を分析して価値の実体を解明しているところについて問題にしているのであろうという、見当がつくのである。なぜ、見当がつくと言えるだけではっきりそこだと言えないのかといえば、まず第一に、「いわゆる使用価値の捨象」の「いわゆる」の意味がまったくわからないからである。この「いわゆる」を削ってたんに「使用価値の捨象」というのであれば、われわれ低水準の者にもよくわかるのであるが、「いわゆる使用価値の捨象」と言われると、いったい、どういう種類の「使用価値の捨象」なのか、わけわからなくなってしまうのである。そのうえ、まったく感じとることすらできないほど難解なのは「使用価値の捨象を分析する」という、超高水準の「術語」である。いったい、「使用価値の捨象を分析する」とは、どういうことをあらわした文句であろうか、いや、どういうことを言いあらわすことができるのであろうか？

この「いわゆる使用価値の捨象の分析」というわれわれ凡人の理解を超越した言葉の意味をさぐる手がかりはないかと、大木氏の論文の「一」以下「五」までの本文に目を通すと、手がかりどころか、「使用価値の捨象の分析」とか「使用価値の捨象を分析する」とかいう文句そのものが、出るわ出るわ、最初の「一」だけでも、たてつづけに6回も出てき、わずか12ページに満たない氏の大論説の中でなんと、20回もくりかえし現われてくる有様で、まるで、この文句が、氏の論説の主役の位置を占めているかの観がある、いや、現実主役として機能している、と言えるのである。

「使用価値の捨象を分析する」とは、いったい、どういうことを意味するものであろうか？「捨象」とは、ある研究対象の本質を把握するために、その対象について非本質的・二次的な要素または要因をいわば消去するという基本的な研究方法を指して言ったもので、この捨象によって本質的・一次的なものをとりだし解明することを抽象というのであるが、外国語では、どちらも同じ *die Abstraktion, abstraction, l'abstraction* である。「分析」も、同じく研究方法を指していったものであるが、これは自然科学にあっては、実験により、また顕微鏡や化学的試薬をつかって行なうことができるが、社会科学、とりわけ経済学の分野では、「分析」はもっぱら論理的に、論理的抽象によってのみ行われるのである。つまり、抽象（捨象といってもまったく同じ）は、研究対象を分析する一つの主要方法にほかならない。それだからこそ、マルクスは、その『資本論』の「第一版序文」のはじめで、

「経済的諸形態の分析では、顕微鏡も化学試薬も役には立たない。抽象力が両者の代わりをしなければならない。」(Marx-Engels Werke, Bd. 23. S. 12. 邦訳大月版7ページ、傍点一山本)

と教示しているのである。それゆえ、われわれ凡人には、「使用価値の捨象を分析する」という、大木氏の論説の主役の位置を占める文句は、幼い子供らが、「馬から落ちて落馬して」

と言いついて遊んでいるあの戯れ言とまったく同じ性質のノンセンス (nonsense) にすぎないものと思われるのであるが、そういう受け取り方をする輩は、わが大木氏にしてはじめてうちたてえたところの、超マルクスの主張の深遠さ、絶妙さは、とうてい感じとることのできない、あわれ低水準にとめおかれた者でしかないのである。その主役である用語の真実の、深遠な意味は、大木氏の右の画期的論説の全内容を熟読・玩味し拳拳服膺することによってはじめて、ほんのすこしずつ、感じとることができるにすぎないものであることを、よくよく悟るべきなのである。

いずれにせよ、大木氏は、右の「まえがき」の末尾で、「以下、そのいわゆる使用価値の捨象を分析することによって価値の論証がおこなわれているところを、『資本論』の文章にそくして検討してみよう」という文章をかかげることによって、氏のうしろについて『資本論』の該当部分を「見直す」ことを学びとることが絶対に肝要であることをわれわれに教えてくれているので、まずはその教示にしたがって、最初に『資本論』の該当部分の叙述内容がどんなものであるか、それについて「超越者」大木氏がこれをどのように批判し「超克」しているかということ、見習ってゆくことにしよう。

## 2 「見直される」べきマルクスの所論

大木氏によって「見直される」べき重大な「過誤」を犯していることが発見されたマルクスの所論とは、マルクスの主著『資本論』の第一巻第一章の冒頭におかれた第一節の前半部分である。この第一章第一節の叙述は全集版第23巻にしてわずか7ページ、邦訳大月版のそれにして10ページ足らずのきわめて短いものであるが、その内容は簡単に理解できるようなものではなく、かの有名な資本論学者であるデ・ローゼンベルグや河上肇にしてもその簡潔・厳密な文章の意味内容を正しく汲みとることに失敗しているところである。にもかかわらず、その難解をもって鳴る叙述内容をたちまちにして「理解」したばかりでなく、さらに、それに何人も見出しえなかった「見直される」べき重大な「過誤」をば、わが大木氏はみごとに剔抉してみせてくれるのである。このような高度・抜群の「理解能力」と「論理的思考能力」をそなえた『資本論』批判家は、世界広しといえども、古今東西を通じて、いまだかつて、大木氏ひとりをして出現したためしはないのであって、氏が商業雑誌『経済評論』に自ら進んでこの労作を発表されたことは、まことに世界史的偉業といわなければならないのである。そこで、われわれは、氏の偉業のほどをよく学びとるために、氏によって完全に「見直され」重大な「過誤」を犯しているとされたマルクスの文章をまず簡単にみておかなければならない。

『資本論』第一巻第一章は「商品」と題され、その第一節の題名は、「商品の二要因：使用価値と価値（価値の実体、価値の大きさ）」となっている。これら章と節の題名を見ただけで、われわれ凡人には、マルクスがここで論究しているのは商品であって価値ではないこと、こう

した論究の内容を「価値論」と呼ぶことが困難であることは、その内容そのものからいっても、またマルクス自身しばしば注意しているところによっても、そしてまた、つぎにかかげる有名な冒頭のパラグラフの最後におかれた

「われわれの研究は商品の分析から始まる。」(Marx-Engels Werke, Bd. 23, S. 49. 邦訳大月版47ページ, 傍点一山本)

によっても、寸分の疑いもさしはさむ余地はないと思われるのであるが、そのように考えることも、またマルクス自身の注意するところも、わが大木氏の超高水準の見地からすれば、いずれも「見直される」べき「過誤」を犯したものと断定されなければならないのである。なぜならば、さきに引用した氏自身の「まえがき」で氏が簡単に教示しているように、第一章でおこなっているのは「価値の論証」であって、商品の分析などが主題となっているのではなく、その「価値の論証」のためには、「商品の分析」などといった見当違いの分析が必要となっているのではなく、まさしくそのためにこそ「使用価値の捨象の分析」という、超高度水準の論究が展開されているのであって、こうしたことが読みとれないものは、いずれも——マルクスをもふくめて——はるかに低水準の洞察力しか持ち合わせていないのである。

ところで、その「見直される」べき運命にある当のマルクスは、まずその第一節の冒頭で、  
「資本主義的生産様式が支配的に行なわれている社会の富は、一つの「巨大な商品の集まり」として現われ、一つ一つの商品は、その富の基本形態として現われる。それゆえ、われわれの研究は商品の分析から始まる。」

と述べて、商品という範疇が資本主義社会の経済的運動法則の解明を最終目的とするマルクスの経済学の理論体系における端初であることを明示しており、この商品についての分析をまず第一節でおこなっている。だが、この「商品の分析」は、第一節で完結しているのではなく、第二節、第三節、第四節をふくむ第一章全体と第二章までをもふくむものであることは、それらの内容を一読すれば容易に理解されると、われわれ凡人には思われるのである。

だが、われわれ凡人よりはるかに超高水準にある大木氏からみれば、そうした理解はまことにあわれむべき低水準のもので、マルクスが「資本論の頭章」でおこなっているのは「価値の論証」であり、しかもその「価値の論証」については、マルクスが第一節の題目のなかで「価値（価値の実体、価値の大きさ）」としているのは誤りであり、「価値の大きさ」などという「二次的」なことは削りとり、またわけのわからない「実体」などという文字をも取り去って、ただ「価値（価値の発見）もしくは（価値の論証）」とだけにしてかかげておかなければならないのであって、これだけにしておくことによって、「価値論」の「核的部分」を明確に示すようにしなければならないのである。

しかし、右のような大木氏の超高水準の見地からの主張は、氏によって「見直される」マルクスの叙述の真意すら把握し得る自信の乏しいわれわれとしては、とうてい簡単には理解しえられないので、なにはともあれ、まず、マルクスによる商品の分析のあらましを簡単にみてお

くことが適当であり、肝要でもあると思われるのである。

マルクスは、右の冒頭のパラグラフにすぐつづいて、

「商品<sup>①</sup>は、まず第一に、<sup>②</sup>外的対象であり、その諸属性によって人間のなんらかの種類の欲望を満足させる物である。」(ibid. S. 49. 訳47ページ、傍点—山本)

と述べ、つづくパラグラフで、

「……………このような物<sup>③</sup>は、それぞれ、多くの属性の全体であり、したがっていろいろな面から見て有用でありうる。……………」(ibid. S. 49. 訳48ページ、傍点—山本)

として、さらにつづくパラグラフで、はじめて、「使用価値」(der Gebrauchswert, use-value, la valeur d'usage)という概念を明示して、つぎのようにその概念の内容を規定している。第一節の題目に示された「商品の二要因」のうちの第一の「要因」である使用価値についての説明は、ここに集約して示されており、ここの叙述は、われわれがおよそ使用価値についてなんらかの問題を考えるさいにはいつでも必ず基本にすえておくことが大切であると、われわれ低水準の凡人には思われるのである。ところが、ここのくだりは、わが大木氏によって「見直される」べきマルクスの重大な「過誤」に直接かわりあるものとしてとりあげられているところでもあるので、やはり、わが大木氏の卓越した「論証」方法と「過誤剔抉」の手法とをよく学びとるために、以下で、一部不要と思われる個所を省略して……………をもって示し、その他の全文をまず引用してかかげておき、これによってわが大木氏によってその重大な「過誤」を剔抉されるべき当の批判対象の在り方を見ておくことにしよう(各パラグラフの頭につけた④、⑤、⑥……………は、後段で閑説するさい再度引用する手数を省くために山本がつけたもの)。

④「ある一つの物の有用性は、その物を使用価値にする。この有用性は空中に浮いているのではない。この有用性は、商品体の諸属性に制約されているので、商品体なしには存在しない。それゆえ、鉄や小麦やダイヤモンドなどという商品体そのものが、使用価値または財なのである。商品体のこのような性格は、その使用価値の取得が人間に費やさせる労働の多少にはかわりがない。使用価値の考察にさいしては、つねに、1ダースの時計とか、1エレのリンネルとか、1トンの鉄とかいうようなその量的規定性が前提される。……………使用価値は、富の社会的形態がどんなものであるかにかかわりなく、富の素材的な内容をなしている。われわれが考察しようとする社会形態にあっては、それは素材的な担い手となっている——交換価値の」(ibid. S. 50. 訳48-49ページ、傍点—山本。なお文中の「財」という訳語の原語は、原典では Gut, 英語版では something useful であるが、フランス語版では欠落している)。

そこで、交換価値についての論究がはじまる。マルクスは、

⑤「交換価値は、まず第一に、ある一種類の使用価値が他の種類の使用価値と交換される量的関係、すなわち割合として現われる。それは、時と所によって絶えず変動する関係である。それゆえ、交換価値は偶然的なもの、純粹に相対的なものであるように見え、したがって、商品に内的な、内面的な交換価値 (valeur intrinsèque) というものは、一つの形容矛盾 (contra-

dictio in adjecto) であるように見える。このことをもっと詳しく考察してみよう。』(ibid. SS. 50-51. 訳49ページ)

と述べて、ここから交換価値の論究に入っていくのであるが、ここに示されているように、一商品の交換価値について、一方では相手次第で変わる相対的なものであるが、他方では、その「交換におけるねうち」そのものは、その商品そのものが本来もっているねうちではないかということについての、さまざまな経済学者の相反する見解の間の「矛盾」に注目して、この「矛盾」の追究から交換価値の論究をすすめているところに、マルクスの並々ならぬ理論的分析の卓越のほどがうかがわれるのである。だが、しかし、わが大木氏の超高水準の眼識のもとでは、このようなマルクスの論究のやり方は、もちろん、まったくみすばらしいものでしかなく、大木氏にしてはじめて完遂した「使用価値の捨象の分析」という肝心なめのことなどまったく感じとることすらしえないということにも、マルクスの「致命的欠陥」がうかがわれるといわなければならないのである。

われわれとしては、これから、その「欠陥」だらけのマルクスによる交換価値の論究の叙述を見ていかなければならないのであるが、いちいちパラグラフごとに大木氏による「欠陥」指摘を学びとってゆくというやりかたでは、繁雑かつ多くの紙数を要することになるので、マルクスが交換価値の論究をつづけて、その最後の到達点である価値にいたるまでの叙述を、つぎに一括してかかげておくことにしたいと考える(……は省略部分)。

◎「ある一つの商品、たとえば1クォーターの小麦は、 $x$ 量の靴墨とか、 $y$ 量の絹とか、……要するにいろいろに違った割合の諸商品と交換される。だから、小麦は、さまざまな交換価値をもっている……。しかし、 $x$ 量の靴墨も $y$ 量の絹も……その他も、みな1クォーターの小麦の交換価値なのだから、 $x$ 量の靴墨や $y$ 量の絹……などは、互いに置き替えられうる、または互いに等しい大きさの、諸交換価値でなければならない。そこで、第一に、同じ商品の妥当な交換価値は一つの同じものを表わしている、ということになる。しかし、第二に、およそ交換価値は、ただ、それとは区別される或る実質の表現様式、「現象形態」でしかありえない、ということになる。

④さらに、二つの商品、たとえば小麦と鉄とをとってみよう。……この関係は、つねに、与えられた量の小麦がどれだけかの量の鉄に等置されるという一つの等式で表わすことができる。たとえば、1クォーターの小麦= $a$ ツェントナーの鉄……。この等式はなにを意味しているのか？ 同じ大きさの共通なものが、二つの違った物のうちに、……存在するということである。だから、両方とも或る一つの第三のものに等しいのであるが、この第三のものは、それ自体としては、その一方のものでもなければ他方でもないのである。だから、それらのうちのどちらも、それが交換価値であるかぎり、この第三のものに還元できるものでなければならない。

……………



③この共通なものは、商品の幾何学的とか物理学的とか化学的とかいうような自然的な属性ではありえない。およそ商品の物的な属性は、ただそれが商品を有用にし、したがって使用価値にするかぎりではしか問題にならないのである。ところが、他方、諸商品の交換関係を明白に特徴づけているものは、まさにその使用価値の捨象なのである。この交換関係のなかでは、ある一つの使用価値は、それがただ適当な割合でそこにありさえすれば、ほかのどの使用価値ともちょうど同じだけのものと認められるのである。……………

④使用価値としては、諸商品は、なによりもまず、いろいろに違った質であるが、交換価値としては、諸商品はただいろいろに違った量でしかありえないのであり、したがって一分子の使用価値をも含んではいないのである。

⑤そこで商品体の使用価値を問題にしないことにすれば、商品体に残るものは、ただ労働生産物という属性だけである。しかし、この労働生産物も、われわれの手の中ですでに変わっている。労働生産物の使用価値を捨象するならば、それを使用価値にしている物的な諸成分や諸形態をも捨象することになる。それは、もはや机や家や糸やその他の有用物ではない。労働生産物の感覚的性状はすべて消し去られている。それはまた、もはや指物労働や建築労働や紡績労働やその他一定の生産的労働の生産物でもない。労働生産物の有用性といっしょに、労働生産物に表わされている労働の有用性は消え去り、したがってまたこれらの労働のいろいろな具体的形態も消え去り、これらの労働はもはや互いに区別されることなく、すべてことごとく同じ人間的労働に、抽象的・人間的労働に、還元されているのである。

⑥そこで今度はこれらの労働生産物に残っているものを考察してみよう。それらに残っているものは、同じまぼろしのような対象性のほかにはなにもなく、無差別な人間的労働の、すなわちその支出の形態にはかわりのない人間労働力の支出の、ただの凝固物のほかにはなにもない。これらのものが表わしているのは、ただ、その生産に人間労働力が支出されており、人間的労働が積み上げられているということだけである。このようなそれらに共通な社会的実体の結晶として、これらのものは価値——商品価値なのである」(ibid. SS. 51-52. 訳50-52ページ、傍点—山本)。

以上、大木氏によって「見直される」べき運命にあるマルクスの叙述部分をすべてかかげたので、節を改めて大木氏が右の叙述の中にいかに「致命的欠陥」を剔抉してみせてくれるか、その超高水準の眼識のほどを実見することにしよう。

### 3 「商品体の使用価値の捨象」の問題

大木氏は、まず「商品体の使用価値の捨象」と題するその「一」の冒頭で、

「マルクスは、価値の論証のために、商品体の使用価値の捨象を、ついで労働生産物の使用価値の捨象を分析している。」(101ページ)

という文章を据えて、さきに引用したマルクスの叙述の「見直し」を開始している。これによってはやくも、マルクスの右の叙述そのものは交換価値を論究して「価値の実体」を解明するものだとするマルクス自身の見地は、そもそもの始めから完全に誤りであり、それは、すべからく「価値の論証」のためのものと考えられなければならないという、マルクスをはるかに越える超高水準の見地が示され、さらに、マルクスが、その叙述の④パラグラフでは、商品体の使用価値の捨象が分析され、ついで、また労働生産物の使用価値の捨象が分析されていると解さなければならないという、われわれ凡人の通常の理解力をはるかに超越した眼識のほどが、天啓のごとく、われわれの前に示され、ついでこの天啓のごとき見解をもって、「超越者」大木氏は、ただちにマルクスの「致命的欠陥」の闡明にとりかかるのである。

「マルクスは、商品の交換関係を明白に特徴づけているものは、まさに商品の使用価値の捨象であるという。そして、商品は、交換価値としてはまったく使用価値をふくんでいないとしたうえで、その使用価値の捨象についてつぎのようにのべている。

「そこで、商品体の使用価値を度外視すれば、諸商品体になおのこるものは労働生産物という属性だけである。……………」

マルクスは、商品体をとりあげ、その使用価値を度外視するならば商品体には労働生産物という性格だけがのこり、商品体はただの労働生産物だけになってしまうというのである。

はたして、マルクスのようにいうことができるであろうか」(101-102ページ、傍点—山本)。

ここでまず、われわれ凡人は、「労働生産物という属性」という文字は、「ただの労働生産物」と読むべきであるという、超高水準の理解能力を思い知らされるのであるが、その超高水準の理解能力をほんのすこし働かすことによって、マルクスの「致命的欠陥」は、たちまちつぎのように暴露されてしまうのである。

「まず、マルクスがここで、商品ではなく、いきなり商品体の使用価値の捨象について述べだしていることに留意される必要があるだろう。

もし、商品ではなく商品体をもってきてその使用価値を度外視するならば、なにがそこにあるであろうか。

マルクスじしん、おなじ章のすこしまえのところで、つぎのようにのべている。

「ある物の有用性は、その物を使用価値にする。しかし、この有用性は空中にういているのではない。この有用性は商品体の諸属性に制約されているので、商品体なしには存在しない。それゆえ、鉄や小麦やダイヤモンドというような商品体そのものが使用価値または財なのである。」

ここにみられるように、マルクスにとっては商品体そのものが使用価値なのである。したがって、マルクスが商品体の使用価値を度外視するということは、論理的にいうと、いわば使用価値の使用価値を度外視するということになるはずであろう。つまり、商品体の使用価値を度外視することによって、商品体そのものがまるごと度外視されてしまうということになるので

ある。もはやそこには、なにものこされていはいはずである。商品じたいが度外視されてしまうのだから、およそ商品体になにがのこるかなどと問題にすることもできなくなってしまうはずなのである。マルクスのように、「そこで、商品体の使用価値を度外視すれば、商品体になおのこるものは労働生産物という属性だけである」などということは、論理的にみても不可能なことであろう」(102ページ、傍点―山本)。

ごらんのように、マルクスは、たったひとこと、「商品体そのものが使用価値なのである」(④)という文句を口に出したばかりに、超高水準の論理的思考能力にひとり恵まれたわが大木氏の鋭い眼識によってまことにぶざまな「使用価値の使用価値を度外視するもの」として、いとも手輕に槍玉にあげられてしまう運命となっているのである。「致命的欠陥」は、まさしく右の一言にある。わが大木氏の超高水準の論理にしたがえば、「商品体そのものが使用価値である」(Der Warenkörper selbst ist ein Gebrauchswert; A commodity is a use-value, something useful; Ce corps lui même est une valeur d'usage)という命題、つまり単純化していえば、「AはXである」という命題は、 $1 + 1 = 2$ とまったく同じ意味のもので、AとXとはまったく同じものであることを明示したものと解さなければならないのである。つまり、われわれ凡人が通常理解しているような主語と述語との関係をそこに見出すべきではなく、つねに、主語と述語はまったく同一のものであり、これを逆にしても、ちょうど $1 + 1 = 2$ が $2 = 1 + 1$ と同じことになるだけであると解さなければならないのである。それゆえ、いま、かりにここに一方ではお追従を<sup>ついでよう</sup>いいながら他方では悪口をいいふらすということでは有名なOなにがしという人物がいるとして、この人物の正体をよく知っているある人が、マルクスの口調をそのまま真似て、大木氏の前で、

「O氏その人は腰巾着である。だが、O氏そのひとから腰巾着を度外視すれば、O氏そのひとに残るものは陰謀家という属性だけである。」

と、得意になって言ったとすれば、その人は、たちまち、大木氏から鋭い超能力にみちた一喝をくらって、すごすごと引きさがらなければならない、みじめな立場におちいることを免れることはできないのである。

「なんて、マルクスと同じようなたわごとを言うか。お前は、O氏そのひとがすなわち腰巾着であるといっているではないか。だからO氏そのひとから腰巾着を度外視するとは、腰巾着から腰巾着を度外視するということになるではないか。腰巾着から腰巾着を度外視すれば、なにが残るというのか。そこにはもはやなににも残されていないではないか。すこしはわが輩の超能力の論理的思考のありがたさのほどを学びとるがいい」。

ごらんのように、「商品体の使用価値の分析」という、初発の「問題」において、マルクスは、わが大木氏の誇るべき超能力の論理的思考によって、あえなくもその「致命的欠陥」を剔抉されてダウンするという羽目におちいってしまうのである。わが大木氏にしてひとりその身につけることのできた、この超能力の論理的思考の偉力のなんと絶大なことであろうか！

#### 4 「労働生産物の使用価値の捨象」の問題

「AはXである」という命題の意味するところは、「1+1は2である」とまったく同じで、それは「AイコールXであり、XイコールA」と解されるべきであるという、わが大木氏によって初めてうちたてられた超能力的判断なるものは、マルクスが犯している「致命的欠陥」を暴露するもっとも有力は論理的武器として役立てられているのであって、マルクス自身、その問題の所在すらつかめなかった重大な問題、つまり、「労働生産物の使用価値の捨象」なる問題のごときは、以下、大木氏自身の明確な所論が実証しているように、大木氏によってはじめて開発されたこの世紀的な<sup>ウルトラ</sup>超論理的武器をさらにいっそう発展的に適用することによって、あっという間もないほど即時・手軽に、解決され、マルクスは再びみじめなダウンを喫する運命に陥るのである。この発展させられいっそう磨きをかけられた超論理的武器の卓越した効力のほどは、前節での経験によりすでに十二分に察知することができるのであって、この「4」での「問題」については、氏の論説の「二」の冒頭の部分を一読すれば大木氏の超能力は疑う余地なく鮮明になるものと考えられる。そこで、その聞かせどころだけ引用してかかげることにし、それについての注記はできるだけ簡単にしておきたいと思う。

大木氏はまず、「ところがマルクスは、つづけてつぎのようにのべている。」(103ページ)

と述べて、マルクスの叙述の中の④のパラグラフの前半部分を引用してかかげ、これについてつぎのようにその「致命的欠陥」を指摘している。

「みられるように、ここでは、「もしわれわれが労働生産物の使用価値を捨象するならば、それを使用価値にしている物的な諸成分や諸形態をも捨象しているのである」とのべられている。とすると、論理的にいった、いまさきに商品体の使用価値の捨象後にのこるとされたばかりの労働生産物という属性から、ここでまたさらに使用価値を捨象することになるであろう。マルクスによれば、商品体の使用価値を度外視したあと商品体にのこるとされたばかりの労働生産物という属性に、そもそも、まだ使用価値がのこされているのだろうか。すでに使用価値を捨象したあと、そこからさらにも一度——つまりおなじ商品体からつづけて二度——使用価値を捨象することができるのであろうか。ここでマルクスのいう労働生産物という属性は、商品体の使用価値を度外視したあとにのこされたその商品体の属性ということなのであり、どうかんがえてみても、そこにはもはや使用価値などあろうはずもないだろう。したがって、ないものを捨象できるはずはないのである。マルクスのように、「労働生産物の使用価値を捨象する……」などということは、論理的にみても不可能なことであろう」(103ページ)。

明敏な読者諸君は、超能力の持主である大木氏が、マルクスの叙述のうちのどこに急所を、「致命的欠陥」を秘めた個所を発見したか、容易に理解されることであろう。マルクスは、はじめ、商品体の使用価値を捨象すると、そこには労働生産物という属性だけがのこると言い、

つぎに労働生産物の使用価値を捨象するならば、……」と言っているが、まさに、ここにこそ、その急所を見出さなければならないことを、わが大木は見破ったのである。わが大木氏の超能力の論理的思考能力によれば、「労働生産物という属性」と「労働生産物」とは完全に同一のものであることが、明確に断定されうるのであり、またそう断定されなければならないのである。わが大木氏のそれにくらべて貧弱きわまる論理的思考能力にしか恵まれないわれわれ凡人は、「労働生産物という属性」というのは、商品体のもっているいろいろの属性のうちのたった一つの属性を指していったもので、労働生産物としての商品体そのものを指して言ったものではないと思われるのであるが、そういう受けとり方をするのは、そもそも低劣な論理的思考能力しか持ち合わせていないことなのよりの証拠なのである。「労働生産物という属性」と「労働生産物」とはもともとまったく同一であることが、わが大木氏の超能力によって断定されているのである。にもかかわらず、マルクス自身、「労働生産物という属性」という文字と「労働生産物」という文字との、完全な同一性を見失って、「労働生産物の使用価値を捨象するならば」という自分自身の文章がほかでもなくまさしく「労働生産物という属性の使用価値を捨象するならば」という超ナンセンスなものになってしまっていることが皆目わからないとは、また、なんとあわれむべき低劣水準の思考能力しかもたぬマルクスであろうか！ それにくらべて、わが大木氏の超能力の論理的思考の偉力のなんと絶大であることよ！ この絶大な論理的思考にかかれれば、「労働生産物」という言葉は、いったん「労働生産物という属性」と同一のものとされたかと思うと、場面が変われば、それはまた「使用価値をもったもの」という意味のものにたちまち変化＝発展して、さらにマルクスの「致命的欠陥」を暴露する有力なきめ手に成り変わるものであって、こうした余人の追随を絶対に許さない「弁証法的<sup>へんげ</sup>変化」の論理的秘術は、氏の論説の「三」のなかで、絶妙に展開されているのである。

## 5 「価値の発見」の問題

大木氏は、さきにかかげたマルクスの叙述のうちの⑧のパラグラフをあくまで追求して、まず

「マルクスは、いわゆる商品の交換関係における商品の使用価値の捨象をとりあげて分析すべきところで、商品体あるいは労働生産物の使用価値の捨象なるものをとりあげている。そしてそれでいて、その労働生産物の使用価値の捨象を分析するということによって抽象的人間労働が発見されることになっている。」(105ページ、傍点—山本)

と述べて、マルクスの「致命的欠陥」がどこにあるかということを明らかにしている。マルクスは、超能力の持主である大木氏の指示にしたがって、「交換関係における商品の使用価値の捨象を分析すべきであるのに、「労働生産物の使用価値の捨象を分析する」ことによって「抽象的人間労働」を発見するという、重大な誤りを犯しているのである。おそらく、低能力

のマルクスにとっては、二商品の交換関係そのものが客観的には二商品の使用価値を捨象していることをあらわしているのであって、そのうえまた、その使用価値の捨象を分析するなどという、わが大木氏ひとりにはのみ許された超能力の論理的操作など、とうてい自分のないうところではないと観念したのであろうし、それゆえにまた「商品体あるいは労働生産物の使用価値の捨象の分析」などという芸当もあきらめて、労働生産物の使用価値を捨象したあとに残るものを論究したと考えているのであるが、それがまた、大木氏によって錯覚であると断定され、「マルクスは、労働生産物の使用価値の捨象そのものの分析」によって、「抽象的人間労働を発見した」と考えなければならない、と教えられるのである。

つづいて、大木氏は、

「抽象的人間労働の発見を説明したあと、マルクスはさらにつぎのようにいう。」(105ページ)と述べ、マルクスの重大な「過誤」の指摘を、つぎのように展開している。

「マルクスは、その使用価値を捨象したあとの労働生産物にのこっているものは、抽象的人間労働という社会的実体の結晶としての商品価値であるという。

マルクスによれば、商品体の使用価値を捨象すると、商品体はただの労働生産物になる。その労働生産物から、もう一度使用価値を捨象すると、こんどは抽象的人間労働の生産物になる。労働生産物には、抽象的人間労働が対象化されたもの、すなわち商品価値だけがのこっているということになる。商品だけの属性であるはずの価値が、その使用価値を捨象したあとの労働生産物にのこるというのである。

ここにいたってもなお、マルクスによって分析の対象とされているものは商品ではなく、使用価値を捨象されたあとの労働生産物とされている。だがそれでいて、使用価値を捨象されたあとの労働生産物にのこされているといわれる価値、すなわち、労働生産物の価値が、一転、商品価値であるとされる。ここにきて、労働生産物の価値が商品の価値に、労働生産物が商品にすりかえられていることがわかる。

しかし、じつは、ここまで労働生産物といわれていたものは、もともと、使用価値と交換価値とをもった労働生産物、つまり商品でなければならなかったのである。だからこそこにきて、労働生産物を商品にすりかえ、労働生産物の価値を商品価値としなければならなかったのである。その使用価値の捨象が分析さるべきものは、マルクスとしては、はじめから商品体やら、商品体の使用価値を捨象したあとにのこるとされる労働生産物やらなどではなく、商品でなければならなかったのである」(105-106ページ、傍点—山本)。

この大木氏の堂々たるマルクス批判の文章を読んで、低劣な思考能力しか持ち合わさないわれわれも、やっと、なぜ、超能力のわが大木氏が、その論説の「一」と「二」で、執拗に「商品体」と「労働生産物」という言葉を追求して、マルクスの重大な「過誤」を剔抉することに力を注いでいたか、ということがわかってきた、というわけである。さよう、マルクスが「商品体の使用価値を度外視すれば」といったそのあとに在る商品体は、使用価値の全部が捨象さ

れてしまったただの品物であってそれは商品ではなくなっているのである。そこに残っている「労働生産物という属性」だけの労働生産物も、もはや「ただの労働生産物」であって商品ではありえない、それとまったく違った物となってしまっているのである。このことを忘れて、商品体や労働生産物をば商品そのものといつまでも考えているとは、なんと、マルクスの論理的思考能力の低劣なことであろうか！ 商品ではない商品体やら商品でない労働生産物やらをここに持ち出してきておきながら、最後にそれを商品そのものに「すりかえる」とは、また、マルクスは、なんとという間抜けな「すりかえ」をしたものでしょうか！ それよりは、わが大木氏の超能力の論理的思考によってはじめて解明されたように、そもそものはじめから商品である商品体、商品である労働生産物というように、それらが商品そのものと同じであることを明示して論究すればよかったのに、大木氏にくらべてはるかに低水準の論理能力しか持ち合わせてないマルクスの、これはまた、なんとという、大失態であろうか！ それゆえ、折角、苦心の論究の末に、マルクスが

「だから、商品の交換関係または交換価値のうちに現われる共通物は、商品の価値なのである。」(ibid. S. 53. 訳52ページ)

と述べているのにたいして、わが大木氏が、

「マルクスは、労働生産物の価値をそのまま商品の価値にすりかえている。マルクスにとっては、労働生産物の価値は商品の価値であり、両者はまったく混同視されているといえよう。」(107ページ、傍点―山本)

という、断固たる、前代未聞の世紀的審判が下されたとしても、それは理の当然というべきなのである！

## 6 マルクスの「使用価値の捨象」の「致命的欠陥」

さて、マルクスの「商品体および労働生産物の商品へのすりかえ」を暴露し糾弾するという世紀的偉業を成しとげたわが大木氏は、今度は矛先をかえて、マルクスが交換価値の論究に当たって行なっている「使用価値の捨象」についての問題点を取りあげる。これは、われわれ凡人が通常言っているようなたんなる「使用価値の捨象」の問題ではなく、わが大木氏の超高水準の「概念規定」によれば、厳密に「使用価値の捨象の分析」の問題と言わなければならないものである。マルクスが、さきにかかげた③、④、⑤の順序で交換価値を論究して「共通なもの」を抽出してくるのにたいして、わが大木氏は、その「四」において、つぎのような批判を展開している。

「交換される諸商品の使用価値は、たがいにことになったものである。交換される諸商品から使用価値を捨象すれば、たがいにことになったものを捨象することとなり、そのあとに「ある共通なもの」がのこることになるだろう。そう考えたマルクスは、商品の交換価値の分析による

抽象を「ある共通なもの」の把握までおしすすめたところで中断する。そしてこんどは、「諸商品の交換関係を明白に特徴づけているものは、まさに諸商品の使用価値の捨象なのである」から、交換にさいしての諸商品の使用価値の捨象を追究して分析すれば、「ある共通なもの」のよりすすんだ把握にたつするであろうというわけである。

だが、そもそも、「諸商品の交換関係を明白に特徴づけているものは、まさに諸商品の使用価値の捨象なのである」ということができるのであろうか。ここがかんじんなところであろう。マルクスにしても、どういう理由でそのようにいえるのかはここで説明していない。商品の交換関係を特徴づけているものは、使用価値の捨象がいものものではありえないのかどうかにも論及されていないのである。

ところで、商品の交換関係を明白に特徴づけるものとして、交換される諸商品が使用価値としてはたがいにことなるということをあげることができるであろう。およそ商品の交換関係においては、交換される諸商品が使用価値としてはたがいにことなるという関係がかならずその一面をなしていなければならない。つまり、マルクスがのべていることとはちがって、商品の交換関係においては、使用価値が捨象されることはないのである。交換されるべき使用価値が捨象され、したがって使用価値としての相互の差異が捨象されとしたならば、そこには、そもそも交換関係がなりたたないことになってしまうであろう。

商品の交換関係は、使用価値の面ではたがいにことなり、交換価値の面ではたがいにひとしいという対立的な両面関係である。それらの両面関係のどちらでも一方がなければ両面関係でなくなり、商品の交換関係はなりたたないことにもなるのである」(108ページ、傍点一山本)。

ごらんのように、わが大木氏が、その超能力の眼識を自在にあやつって、マルクスの叙述のうちに見出した第三の「致命的欠陥」は、マルクスがそもそも交換価値についての論究を開始した直後に説明しはじめている⑩パラグラフのつぎの個所から始まっているものである。

「そこで、第一に、同じ商品の妥当な交換価値は一つの同じものを表わしている、ということになる。しかし、第二に、およそ交換価値は、ただ、それとは区別される或る実質の表現様式、「現象形態」でしかありえない、ということになる。」(idib. S. 51. 訳50ページ)

ということを導き出し、ついでこの「同じもの」「或る実質」を究明するために、二つの商品の交換関係を考察し、そのどちらも、

「交換価値であるかぎり、この第三のものに還元できるものでなければならない。」(idib. S. 51. 訳50ページ)

ことを明らかにし、つづくパラグラフで、この「第三のもの」を「一つの共通なもの」として把握したところで、この「共通なもの」がなんであるかということを追究することになり、そこで、二つの商品に「共通でないもの」を捨象して「共通なもの」を抽象してくるという論理的操作、いいかえれば論理的な分析をすすめているのが、⑨、⑪、⑫の各パラグラフの内容



である。それゆえ、われわれ凡人には、「共通でないもの」としてまず使用価値があげられ、その使用価値の捨象が第一に行なわれるのは理の当然と思われるのであるが、それは、大木氏の超能力の眼識に照らしてみるならば、マルクスはそこで「使用価値の捨象の分析」を中断するという重大な誤りを犯しており、さらに㊟パラグラフで、

「諸商品の交換関係を明白に特徴づけているものは、まさに諸商品の使用価値の捨象である。」(idib. SS. 51-52, 訳51ページ)

と断定しているのも、許しがたい曲論なのである。わが大木氏はそれが曲論であり重大な「過誤」であることをわれわれ凡人にもよくわかるように、「使用価値が違うからこそ交換関係がある、違う使用価値をぬきにして交換関係が成り立つか」と論じて、「商品の交換関係は、使用価値の面と交換価値の面という、対立的な両面関係である」と、まことにすばらしい「弁証法的把握」の片鱗を教えさとしてくれている。

以上のようにして、マルクスの「交換関係を特徴づけているものは、使用価値の捨象である」という主張は簡単に一蹴されてしまうのであるが、マルクスがダウンを喫したとみるや、わが大木氏は、一転して、さきにみたように、

「しかしながらもちろん、商品交換関係における使用価値の面、すなわち使用価値としてはたがいにことなるといふ面を捨象することは可能である。商品の交換関係からその使用価値の面を捨象してみれば、たがいにひとしいとされる交換価値の面のみがのこるであろう。だからそのさいは、使用価値が捨象されることによって、商品の交換関係はそのままにはとどまらない。商品の交換関係は商品の交換価値としての等置関係にかわってしまうのである。商品の交換価値としての等置関係は、商品の交換関係の一面をなすにすぎない。」(109ページ、傍点—山本)

という、マルクスの誤った主張を認めてやるような、見方によっては、——文字の上では——まったく同じ「使用価値の捨象」なるものを——「可能である」という言葉をそえて——説いているのである。

だが、大木氏はマルクスの主張に同調しているかにみえるとはいへ、われわれは、その間には、超能力の論理的思考を自在にあやつるわが大木氏と、平凡・低俗な論理的思考に頼るのがやっとなんていうかのマルクスとでは、その立論の根拠そのものが、まことに天と地ほどに隔絶しているという実態をよくよく見てとらなければならないのである。では、その根拠は、どのように隔絶しているかといえ、マルクスにあっては、さきにくりかえしたように、まず最初に一商品の諸交換価値について論理的分析を加えることによって「第三のもの」、「一つの共通なもの」を突きとめることによって、交換価値の「共通者」への還元からさらにすすんで、その「共通者」を追究することになり、「共通者」を導きだすためにまず第一に使用価値を捨象したのち、今度は——使用価値はもう捨象済みで、存在しない——労働生産物という属性をもつだけの商品体そのものの分析を推しすすめることによって、最後に、その「労働生産物という属性」の「労働」とは、「抽象的・人間的労働」でなければならないこと、つまり、「共通物」

は「抽象的・人間的労働のただの凝固物」にほかならないことを突きとめることができたものとなっているのである。

ところが、マルクスを軽く超越するわが大木氏にあっては、その順序はまさに正反対であって、最初に「商品の交換関係からその使用価値の面を捨象して、交換関係をば、商品の交換価値としての等置関係という、一面の関係にしてみなければならない」というのである。それゆえ、低水準の論理的思考能力にしか恵まれないわれわれ凡人は、わが大木氏のように順序を逆にしたのは、「共通者」という概念がどこから得られるか、そしてまたその「共通者」をどのようにして把握するのか、その論理の手がかりがなくなってしまうのではないかと危ぶまれるのであるが、それは、「下司のかんぐり」よりも劣る妄想にすぎないのであって、むしろ超能力の論理的思考をあやつるわが大木氏によって完膚なきまでにその「錯誤」を糺弾されなければならないのは、大木氏の提唱する超論理的思考の順序をひっくりかえしたマルクスそのひとでなければならないのである。わが大木氏は、右のマルクスの完全な「錯誤」を追求して、例の「使用価値の捨象の分析」という「宝刀」をひらめかして、マルクスの交換価値論究の順序を、つぎのように真っ二つに成敗してしまうのである。

「たとえば、商品の交換価値としての等置関係をあらわす  $X$  量の  $A$  商品  $= Y$  量の  $B$  商品という等式をとりあげてみよう。この等式は、しばしばあやまってうけとられているように、商品の交換関係の全容をあらわしているものではない。使用価値の面の不等置関係は捨象されており、二商品の交換にさいしての交換価値の面での等置関係のみをあらわしている。

だから、諸商品の交換にさいしての等置関係においては、商品の使用価値は捨象されているということもできよう。しかし、商品の交換関係においては、使用価値は捨象されているとみることとはできない。交換される諸商品が使用価値としてはたがいにことなるという関係なしには、交換関係そのものになりたないものである。使用価値が捨象されているといえるのは商品の交換関係についてではなく、交換にさいしての交換価値の面での等置関係についてである。したがって、「諸商品の交換関係を明白に特徴づけているものは、まさに諸商品の使用価値の捨象なのである」ということはできないし、あえていうならば、それは誤りにほかならない。

こうして、「諸商品の交換関係を明白に特徴づけているものは、まさに諸商品の使用価値の捨象なのである」という誤った命題を根拠にして、分析の対象をそれまでの交換価値関係からいわゆる使用価値の捨象へと転換することは、けっして妥当とはいえないであろう」(109ページ、傍点—山本)。

ごらんのように、マルクスがてもなくいとも簡単に成敗されたのは、そもそも、㊤パラグラフで、「1クォーターの小麦は  $x$  量の靴墨とか、 $y$  量の絹とか……、要するにいろいろに違った割合の諸商品と交換される」という文章をもって、一商品の交換価値の論究をはじめたその出発点において、「それぞれの商品の使用価値は違っていて、捨象してはならない」ということを極力強調しておかなかったためであり、その使用価値の重大な差違を度外視してしまっ

で、簡単に、「第一に、同じ商品の妥当な諸交換価値は一つの同じものを表わしている」などという「結論」をひきだすべきではなかったのである。「一つの同じものを表わしている」などという完全に誤った「結論」をひきだしたために、④パラグラフで、二つの商品の交換関係をば誤って等置関係だと思いこみ、——というのは、超能力のわが大木氏が喝破しているように、使用価値の面では等置関係などありえない、違っているからこそ交換されるのであるから、——そこで、両商品に「共通なもの」はなにかなどという見当違いの問題を追究することになって、そのはじめで、使用価値の捨象という重大な問題を簡単に片づけてしまうという、致命的な「誤謬」を犯すにいたったのである、と、こういう次第なのである。こうしたマルクスの「致命的欠陥」なるものは、超能力の論理的思考を自在にあやつるわが大木氏にはじめて剔抉しえたものなのである。ところで、マルクスの「致命的欠陥」を暴露しおえたところで、わが大木氏が、その超能力の論理的思考をみごとに駆使して、大木氏にはじめてその問題の所在を確認することができた問題、そしてひとり大木氏によって解決されるべき運命にある問題とは、いったい、どういうものであろうか？ これを教えてくれるのが、氏の世紀的論説の「五」、つまり珠玉の結語というわけである。

## 7 マルクスの「価値の抽象」の「虚構」

前節で、私は、マルクスの③パラグラフを引いて、そこからマルクスが引き出した「結論」にもとづいて「使用価値を捨象して」しまつて論ずるというマルクスの論究の仕方の「致命的欠陥」なるものを明らかにしたのであるが、わが超能力の論理的思考者 (Denker) は、さすが世紀的偉業を成しとげる人物だけあって、マルクスが交換価値の論究の出発点としてかかげている③パラグラフそのものについて、その「根本的錯誤」の剔抉にまで、その鋭い眼識をみごとに活用してみせてくれているのであって、それが、「価値の抽象」と題された「五」で、誰にもわかるように、みごとに展開されているのである。

わが大木氏は、まずマルクスの叙述のうちの③パラグラフを引用して、

「マルクスは、商品が直接に交換されあう状態において、ある一定の商品をとりあげる。そして、その一定の商品がその他の諸商品と交換されるばあい进行分析の対象としている。」(110ページ)

と述べ、この③においてマルクスが引き出した「ある同じもの」という言葉をあげて、マルクスはこれについてさらに追究している、とまで述べてきたところで、とたんに中断して、つぎのような、まさに青天の霹靂<sup>へきれき</sup>さながらの断定を頭から下すのである。

「ところで、マルクスがここで想定しているような状態は、現実には通常ありえないような状態である。ある一定の商品が、貨幣の媒介なしにその他の諸商品と直接に交換されるような社会状態は、商品経済にとって正常な現実の状態ではない。マルクスがここで想定しているよ

うな状態は、かれが生きていた当時、かれの身边に現存していたものでもあるはずがない。それはいわば非現実的なものである。

だが、およそ経済学がとりあげて分析の対象とするものは、現実にはありえないような状態であってはならない。じっさいには存在しないが、観念のなかにのみ想定しうような状態であってもなるまい。実存するものでなければならないのである。マルクスの立脚する唯物論からしても、現実的なものこそ出発点、立脚点でなければならぬのではないか」(111ページ、傍点一山本)。

読者諸君は、この神託のごとき美事な、わが大木氏の論断のありがたさをとくと玩味しなければならない。これこそ、まさに前代未聞の超能力をひとり身につけたわが大木氏によって喝破された永遠の真理と受けとらなければならないのである。「ある一定の商品が、貨幣の媒介なしにその他の諸商品と交換されるような社会状態」が、かつての地球上に存在したすべての民族にとって必然的かつ正常なものであったということは、人類学者、考古学者、歴史学者、民族学者と名づけられるほどの人々、何十万人にも上る学者が一人残らず、例外なしに確認しているところであり、また、そのような「社会状態」が現在でもこの地球上に存在することはすべての人類学者、民族学者、地理学者によって実証されており、こうした物々交換、つまり直接的交換からはじまってそれが一定の発展段階で貨幣商品、つまり貨幣を生みだしたこともまた、これら数えきれないほどの多数の学者が一樣に確認しているところである。だが、わが大木氏によれば、こうした物々交換、つまり直接的生産物交換は現実にはありえないものであり、貨幣がこれらの物々交換の発展の中から必然的に生まれてきた歴史的事実などは、まったく「現実にはありえない」ものであって、そういうことを主張する学者は、「唯物論に照らして」まったく妄想にとりつかれたものと断定されなければならないのである。

なんというすばらしい超能力の持主であろうか！ なんという偉大な発見であろうか！ これまでの数万人、いや数十万人にのぼる、およそ人類学者、考古学者、民族学者、地理学者、そして経済史学者すべて人々は、——もちろん、マルクスをもふくめて——「現実にはありえないような状態」を「現実存在するもの」と誤解し、その誤解を宣伝し、その誤解の上にあるこれ虚構の事実やら虚構の理論やらをつくりあげてきたのである。なんと、驚嘆すべきわが大木氏の超能力の眼識であろうか！

世界史上はじめて右のような驚天動地の大発見をなしとげたわが大木氏は、そのこと一つによっていと軽くマルクスの経済学全体を葬り去ってしまったのであるが、さすが世界史はじまってからの超偉大な学者だけあって、なお、あわれなマルクスが商品の交換価値の論究に執着して「ある第三のもの」、「共通なもの」の解明に苦心しているのを見捨てて放っておくなどという無情な真似はせず、「現実には存在しない状態を取り上げている」という「致命的欠陥」は、寛大にも一応、そのままにしておいて、マルクスがそれに執着している問題についてより簡単でより正しい論究のコツをばマルクスに教示してやるという労をとっているのである。そ

の懇切な教示のあらましは、つぎのとおりである。

「もとより、ここで、二商品が直接に交換されるという現実には存在しない関係を分析することは、やはり当をえたものとはいえないであろう。しかし、それをさておくとすれば、つぎのようにみることができるであろう。

すなわち、マルクスとしては、ここで、この「ある共通なもの」こそ商品の価値なのだと思すべきではなかったのかということである。もちろん、この「ある共通なもの」をうみだす労働はまだ究明されていない。しかし、「ある共通なもの」を交換価値の本質である商品価値としたあと、ひきつづき、この「ある共通なもの」(＝価値)をうみだす労働は、抽象的・人間的労働であることを説明することができたであろう。むしろ、商品を生産する労働は、諸商品に共通な価値をうみだす労働としては、他と共通な労働である抽象的・人間的労働に還元されるとすべきなのである。価値を生む抽象的・人間的労働は、商品の価値関係のなかで客観的に抽象されてくるのである」(112ページ、傍点―山本)。

なんと、この解決方法の簡単・明瞭なことであろうか。マルクスは、苦勞して、「労働生産物という属性」を追究して抽象的・人間的労働に到達し、「ある共通なもの」とはこの抽象的・人間的労働の結晶であることをつきとめ、この抽象的・人間的労働の結晶が商品価値となること、つまり、価値の実体にはかならないことを突きとめたのであるが、わが超能力の持主、大木氏は、これをひっくり返して、その超能力の論理的思考を駆使して、なんらの予備的考察もなしに、そのものずばりと、「ある共通なもの」は価値であるとの断定を下し、やおろそのあとで抽象的・人間的労働は「商品の価値関係のなかで客観的に抽象されてくるのだ」と付け加えるだけなのである。超能力に恵まれないわれわれ凡人には、どこからどうして価値という言葉が出てきたのか、それはどういう意味のものかもまったく見当もつかないし、また「商品の価値関係」というのも、「客観的に抽象されてくる」というのも、いったいどういう事柄を指して言われたものか想像することすら不可能であるが、いずれ近い将来、大木氏が、われわれ凡人にもよくわかるように説明してくれるであろうと期待するよりほかに仕方がないのである。もっとも、それはみな観念の世界のことで、現実にはありえないことだ、という理由で捨てられる公算のほうが大であるともいえるのだが。

## 8 大木氏による『資本論』批判の画期的意義

これまで簡単に見てきたところによって、今回突如として雑誌『経済評論』(2月号)に現われた大木啓次氏の論文が、マルクス『資本論』第1巻第1章第1節の叙述内容の内蔵する「致命的欠陥」なるものを、いかに鋭く、かつ根底的に剔抉しているか、そこで、わが大木氏が、われわれ凡人のとうてい及びもつかない超能力の論理的思考を思う存分駆使して、マルクスの叙述の「欠陥」の暴露のみならず、およそ考古学者、人類学者、民族学者、歴史学者、地理学

者といわれるほどの、数十万人、いや数百万人にもものぼる世界のすべての専門的学者のこれまでの一致した見解をもののみごとに打破し、一蹴して、ここにまったく新しい世紀的見解の樹立をなしとげたものであることを、つぶさに教えられたものである。しかし、この種の偉大な世界史的発見は、わが超能力の持主、大木氏の樹立すべき大偉業にとっては、まだほんの序の口にすぎないことを、われわれは銘記しなければならない。大木氏自身、右の論文の「まえがき」でござるに教示しているように、

「マルクスの価値論は、かれの経済学の基礎である」(101ページ)。

その「経済学の基礎」が「致命的欠陥」をもっていることが暴露されたのである。それゆえ当然のことながら、その基礎の上にうちたてられているマルクス『資本論』全体も、その根本から書き改められなければならない。その世界史的偉業は、ひとり、超能力に恵まれたわが大木氏のみがよくなしうところである。『資本論』第1巻、第1章、第1、2節が書き換えられなければならないのはもちろんであるが、直接的生産物交換＝物々交換の歴史的事実をとりあつかった第1章第3節も第2章も、もちろん、問題にならないものとして削除されなければならない。それに代わって、労働生産物が商品として交換されるようになったその最初の時期に、いまから数千年前に、商品交換と同時に貨幣が生まれたことを、理論的に、また歴史的事実に照らして論証するところの、まったく斬新な、画期的貨幣理論が、わが大木氏の手によって、この日本に生まれることを、当然に期待しなければならないのである。

大木氏の世紀的論文に接して、私は、急遽、大木氏の唯一の著作——もっとも水谷謙治氏との共著でしかないが——ともいふべき『経済原論』の内容に目を通したのであるが、この著作のうちの大木氏の担当した前半部分は、『資本論』第1巻の内容そのもののざっとした引き写しにすぎず、ことに最初の「商品」から貨幣にかんする章までその内容はまったく『資本論』の叙述をそのまま写しとってきたかと思われるものばかりである。この『経済原論』が出版されたのは、1981年12月と記されているから、ちょうど10年の間に、わが大木氏は180度の転換をとげたというわけである。

もっとも、そのような、マルクス追従からマルクス批判への転回なるものは、右の『経済原論』の中の叙述にも、その片鱗をのぞかせているとみられないこともないのであって、そこに今日の大木氏によるマルクス批判の萌芽を読みとることも、あるいは不可能ではないようにも思われる。そのことをうかがわせる叙述として、つぎの二つをあげておこう。

「包摂」の問題。

「……………このような、資本関係が生まれるよりもまえにすでに発展していた労働様式を資本のもとへ包摂することを、資本のもとへの労働の形式的包摂とよんでいる」(『経済原論』、106ページ、ゴシック体—大木氏、傍点—山本)。

「労働の技術的および社会的条件を変革し、労働の生産力を高めることによって労働様式を資本のもとへ包摂すること——そのような資本と労働との関係の展開を、形式的包摂にたいし

て、資本のもとへの労働の実質的包摂とよんでいる」(前出, 108ページ, ゴシック体一大木氏, 傍点―山本)。

マニファクチュア以前の単純協業では、手工的労働者は、独立手工業者として労働しても資本家のもとで労働しても、その労働力の流動そのものには変わりがなく、いつでも独立手工業者となりうるから、その「労働」は形式的に「資本のもとに従属する」だけであるが、マニファクチュアの段階では、手工的労働者は部分労働者となり、資本のもとでなければその労働力の流動は行なわれえなくなるから、資本を離れて労働することはまったく不可能になり、その「労働」ははじめから「資本のもとに実質的に従属する」ものとなっているのである。労働力の流動としての労働そのものではなく、これをまったく関係のない労働様式などというものに改変したところに、わが大木氏の超能力がうかがわれるのである。

いまひとつは、『資本論』の「最終目的」とマルクス自身が言明している「資本主義社会の経済的運動法則の暴露」が凝縮して明示されている『資本論』第1巻第24章第7節の「資本主義的蓄積の歴史的傾向」の輝かしい叙述内容がきれいさっぱりその全部が省かれている、ということである。このことは、おそらく、大木氏の脳中には、超能力の論理的思考が、10年前から目覚めはじめており、「資本主義的私的所有の最期を告げる鐘が鳴る」ことに重大な懸念を抱き、むしろ資本主義的生産様式の永遠の存続への確信が芽生えていたことをうかがわせるような意味さえ、もっているようにうけとれるのである。

いずれにせよ、大木氏の今回の論文によって、その超能力の論理的思考がいかにはかりしれない世紀的偉力を秘めたものであるかということとわれわれはつぶさに感得することができたので、いずれ近々のうちに大木氏の手によってつくりあげられ発表されるであろう画期的大著作の出現をまって、これについてとくと学ぶことができることを期待して、このつたない論評の筆を措くことにしよう。

## あとがき

大木氏の今回の突如たるマルクス『資本論』の画期的な超越的批判の論文に接して、わが大木氏がこれまで数十年間にわたってその脳中に秘めていた超能力の論理的思考のほども、またその超能力を駆使してのマルクス『資本論』の「致命的欠陥」にかんする氏の鋭い洞察のほども、まったく予期することすらできなかった凡夫の私としては、自分の不明を恥じるばかりであるが、それにしても大木氏の画期的論文を一読した私の脳中には、つぎの二つの疑問が生まれてきて、どうにも解決することができないという、みじめな境地にはまりこんでいることを、いたく痛感させられるのである。

その一つは、今日まで、レーニン没後、数十万人を数える有象無象の自称・他称の資本論学者のほとんどがマルクス『資本論』の曲解または誤解に終始しているなかで、ただひとり、マル

クス＝エンゲルスのうちたてた唯物弁証法を確実に把握し、これを基礎として『資本論』の難解な内容を、マルクスに忠実・正確に則してみごとに理解しえた唯一の資本論学者ともいべき久留間鮫造氏が、多年にわたって蓄積された成果をまとめて発表した世紀的著作『マルクス・レキシコン』全15巻において、その開巻早々目につく見開きには、「協力者」の一人として、大木啓次氏の名前が見出される、ということである。『マルクス・レキシコン』は、いうまでもなく、マルクス＝エンゲルスの重要な基本的労作のすべてにわたって、重要な項目別に、その叙述のもっとも枢要な部分を、久留間氏自身の構想にしたがって集録し排列したもので、その中に見出されるすべての文言は、マルクスのうちたてた科学的経済学のみならず、唯物史観、弁証法にいたるまで、すべて絶対的に正しく当を得たものとして、みごとに整序されているものである。その内容を成している素材は、久留間鮫造氏が多年にわたって、その蘊蓄を傾けて作りあげたものであるが、この『マルクス・レキシコン』の出版に、いやしくも「協力者」として名を連ねているほどの学究の徒であるならば、マルクス『資本論』について、その「致命的欠陥」を云々したり、またマルクス「価値論」を「見直さ」ないではいられないといった、「非凡の才能」を、いや「超能力の頭脳」をそなえているような世紀的大人物の真似は、まかりまちがっても、できるはずはないのである。それゆえ、久留間氏がその<sup>ひついで</sup>畢生の事業とした『マルクス・レキシコン』の出版準備の過程において、わが大木氏は、その超能力の論理的思考をすでに身につけていながら、あえてその超能力を活用することを抑えて、久留間氏の指示にしたがって、忠実な「協力者」としての実をあげていたのか、それとも、「能ある鷹は爪を隠す」のたとえで、久留間氏を驚倒させることをおそれて、不満ながら、あえてその超能力を発揮しなかったのであるか、それとも、それ以後、数年をへて、突如として天の啓示を得て超能力の論理的思考を身につけることとなり、たちまちマルクス『資本論』の「致命的欠陥」を随所に発見するようになったのか、——このことが、私の脳裡を離れない深刻な疑問の一つとなっているのである。いずれにしても、その疑問を想起するたびに、久留間鮫造先生は、いま地下においでになって、この大木氏の画期的論文のことを伝え聞くことができたとしたならば、そのとき、どのように受けとられたであろうかと考えると、凡夫の私の胸は痛みしきりという有様なのである。

いまひとつの疑問というのは、今年一月末、大木氏の担当する「経済原論Ⅰ」の学年末試験を控えて、その直前に、この大木氏の画期的論文を掲載した雑誌『経済評論』2月号が、立教大学に隣接する事業部の書籍販売所において、数百部、文字どおり山積みになされていて、これが「経済原論Ⅰ」の試験を受ける学生——総数約1000人——に必読の参考書としてすすめられていた、という事実である。試験当日の夕方にはその山積みされていた雑誌がほとんど全部はけてしまっていたので、多分、学生は受験のための参考書としてほとんどもれなく購入したものであると思われるのであるが、はたして、この超能力の論理的思考によってはじめて作りだされた論文を読んで、その一行でも理解することのできた学生が、ひとりでもいたであろうか？



われわれ専門家と称される凡人がいくら読んでも、その深遠な意味が容易にはつかめないほど、常識的思考を絶した超高度の論理的作品である。しかもその中味は、マルクス『資本論』についてあらかじめ予備知識をそなえていることが絶対的要件となっているほど、高度、複雑である。そのうえ、そこに展開されている論理は、超能力の持主にしかわからないほど、常識をはるかに超越した、ウルトラ級のものである。受験当日よりわずか数日前に買いいれて目を通すだけで、その内容について、その一語でもわかるような学生など、どうして、いるものと考えられようか？

加えて、私の疑問をいよいよ解きがたくし深刻にしてやまないのは、大木氏が、この一年間教科書として採用し、これを唯一の教材として使用してきた『経済原論』の内容が、ほとんどまったくマルクス『資本論』から大ざっぱに写しとった素材を並べてつくりあげただけのものであって、そこには、マルクスの理論にたいする批判らしい批判は一語も見出されえない、という事実である。

約一年のあいだ、ずっとマルクス『資本論』から写しとってきた「理論」を終始講義されつけてきた学生が、その一年の末、試験直前になって、突如として、これまで聞かされてきた「理論」は重大な問題があるのだということをくりかえし並べたただけの論文を、それもきわめて高度の、超能力に近いほどの、論理的思考力をそなえ、しかもマルクス『資本論』について正確な知識を身につけているほどの人物にして、はじめてやっと、ほんの少しづつ、その意味内容が感じとられるにすぎないような、<sup>ウルトラ</sup>超高度の「理論的」論文を、試験前日に読まれたとて、どうして、その一部分でも、理解することができるであろうか？

しかしながら、超能力の片鱗を、すでに「マルクス・レキシコン」の「協力者」の時代からその身にそなえはじめていた大木氏であるかもしれず、その<sup>ウルトラ</sup>超能力の思考を縦横無尽に駆使した講義を毎週聴かされてきた学生諸君は、その内容はとにかく、その<sup>ウルトラ</sup>超能力型思考を真似た思考様式だけはいちはやく身につけていて、例によってはなはだ要領よく、超能力型思考の文章から成る答案をこしらえあげることによって、わが大木氏の好感をものにするというコツだけは、よく心得ていたのではないかと推察されるのである。

いずれにしても、以上のような、凡夫にありがちな疑問、いや疑惑が、わが大木氏の画期的論文のテーマを思い出すたびに、私の粗雑な脳中の片隅にきまって浮びあがってくるのであるが、こうした、いわば<sup>きゆう</sup>杞憂も、わが大木氏が、その<sup>ウルトラ</sup>超能力の論理的思考を縦横無尽に操って、マルクス『資本論』をはるかに凌駕する世紀的大著作をわれわれの前に近く教示されることによって、あとかたもなく氷解するであろうことを、私は心から期待し待望してやまないのである。

(Feb. 14, 1991)